杯の召喚士

遥那智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

杯の召喚士

【Ｎコード】

Ｎ６６３２Ｚ

【作者名】

遥那智

【あらすじ】

故郷の村から「ある頼まれごと」のために、はるばる王都までやってきたシャルロット（ロティ）。しかしその「頼まれごと」を果たすのは簡単ではなく――召喚士（ただし条件付き）の天然少女ロティと、何故かロティの面倒を見る羽目になってしまった騎士・リノ。剣と魔法の異世界ファンタジーです。

第1話　はじめてのおつかい

「お金が……ないですっ！」

ここは大小２０の州から成る、広大なイルシオン王国の王都・ロサ。

多種多様な人々や辻馬車が行き交う大通りで、その少女――シャルロットは大量の荷物を石畳に積み上げ、頭を抱えていた。

「路銀は確かに頂いたよ、毎度あり！　幸運を祈ってるよお嬢ちゃん！」

そう言って、最後の乗客だったシャルロットと荷物を豪快に降ろし、晴れ晴れとした笑顔で去って行った幌馬車のおじさんを見送ってから、もう３０分が過ぎようとしていた。

「これからどうしようぅ……」

生まれ育った村から馬車で１０日以上も掛かるこのロサの都に、シャルロットは『とある頼まれごと』を果たすため、やってきた。

お金がないとは言っても、別に物盗りにあったわけではない。

初めての一人旅だからと、村人が総出で手を尽くし、評判のいい長距離幌馬車を手配してくれたし、幌馬車の親父さんもこの道数十年というベテラン。途中、乗合で一緒になった他の乗客も皆人柄が良く、それはそれは快適な馬車旅だったのだが。

生まれて初めての村の外への旅、元来持っていた買い物好きの血が、煌びやかなアイテム達との出会いで大暴れした結果、路銀以外のお金を使い果たしてしまったのである。

休憩で立ち寄った町ごとに、嬉々として買い物をするシャルロットに不安を抱いた親父さんが止めてくれなければ、路銀も払うこと

ができなかったかもしれない。

ちらり、と財布の中を覗く。

少女の一人旅にしては十分過ぎる程の金貨が入っていたはずなのに、そこにはもう数枚の銀貨が残されているだけだった。

村ではご馳走にありつける額だが、物価が違うこの王都では、恐らくパンとミルク代になればマシな方だろう。

シャルロットは、荷物の山の中から頑丈そうな革張りのトランクを引っ張り出すと、よいしょ、とそれに腰を下ろし、もう一度財布の中を覗きこんだ。

「宿代……にもならない、かなぁ……」

そう言うと、肩を落とし、がっくりとうな垂れた。

＊＊＊

「おや？」

昼食後、休憩時間が終わるまで腹ごなしに町をぶらぶらしていたアリアスは、道の片隅で、無防備に大荷物を積み上げ、何やら思案している少女に目を留めた。

（――旅行者かな？それにしても無用心な）

いくら治安の良い王都とは言え、まだ年端もいかない少女が大荷物を抱えてぼーっとしていては、良からぬ輩の的になりやすいだろう。

自他共に認める女好き……いや、フェミニストであるアリアスとしては、そんな様子を見ては放っておけない。

行き交う馬車や人を器用に避けながら向かいの通りに渡ると、その少女、シャルロットに声を掛けた。

「こんにちは、お嬢さん。何かお困り事ですか？」

「ひゃっ！」

背後からふいに声を掛けられ驚いたシャルロットは、そう小さく

呻くと、大きく目を見開きながら、恐る恐ると振り向いた。
歳の頃なら14～15歳、肩上でキレイに切り揃えられたプラチナブロンドの髪に、吸い込まれそうな澄んだ碧眼、『美少女』と言っても過言ではない容姿の少女であった。
（――これはこれは。2、3年後が楽しみな）
値踏みするつもりはなかったが、思わずそう思う。しかしそんなことはおくびにも出さず、笑顔で再度少女に話しかけた。
「こんな所で大荷物を抱えて一人で居ては危ないですよ。ご両親やお連れの方は？」
「あ、あの、一人旅なんです」
シャルロットはおずおずと答えると、そうだ、と小さく手を打って言葉を続けた。
「すみません、お城に行きたいのですが、どう行けばいいのでしょうか」
（――ああ、お城の新しい侍女かな）
町村の良家の子女が、侍女として城に奉公に出されるのは珍しい事ではない。
一人納得したアリアスは「この大通りを真っ直ぐ進むと城門が見えてきますよ」と言って指差した。
その先を背伸びしながら確認していたシャルロットは、密集した建物の隙間に、城の一角と思われる赤レンガ造りの尖った屋根を見つけると、勢いよくお辞儀して礼を言った。
「ありがとうございます！……とにかく、まずはお使いを終わらせなくちゃ」
後半は独り言なのか、そう言うといそいそと荷物をまとめ始めた。
――とはいえ、到底一人で運べる量ではない。
アリアスはチラリと広場の時計台に目をやり、休憩時間がまだ少し残っているのを確認すると、シャルロットの荷物をひょいひょいと抱え「城まで送って差し上げます」とウインクした。

＊

「ところで君はどこから来たんですか？」

城門までの道すがら、何の気なしにアリアスはそう尋ねた。

2人は先ほどの大通りを、大荷物を抱えぼちぼちと歩いている。

「クラベル村です。お花がたくさんで、とてもきれいな所なんですよ」

シャルロットは故郷を思い浮かべながら、満面の笑みでそう答えた。

「それは随分と遠いところから。ご両親と離れてのお城勤めは寂しいとは思いますが、何かあったらいつでも……」

将来有望な美少女と顔見知りになっておくのも悪くない。あわよくば連絡先を渡しておくつもりでそう言ったアリアスに、シャルロットは不思議そうな顔で尋ねた。

「お城勤め……ですか？」

「君はお城で働くために田舎から出てきたんじゃ？」

ふるふると首を横に振る。

「じゃあ一体何の用事があって……」

アリアスがそこまで言うと、シャルロットは、ああ、と言う顔をして

「王妃様にお会いするためにきました」とにこにこしながら答えた。

これにはアリアスが不思議そうな顔で返す。

「君は王妃様の知り合い？」

しかしこの問いにも、シャルロットはふるふると首を横に振った。

その様子に、アリアスの心に徐々に不安が広がり始める。

「じゃ、じゃあ紹介状は？」

「紹介……状？」

そこまで聞くとさすがに何かに気付いたのか、シャルロットも一気に青ざめて言った。

「も、もしかして、王妃様には簡単にはお会いできませんか！？」
アリアスは参った、という風に一度天を仰いだが、すぐにシャルロットの方に向きなおすと、諭すように言った。
「王や王妃は民にお優しい方とは聞きますが、さすがに紹介状もなく、どこの誰かもわからない旅行者ではお城に入ることすらできませんよ」
「ど、どうしよう……っ！」
どうしよう、はアリアスのセリフでもあった。
不安的中、とんでもない世間知らずのお嬢さんに当たってしまったようである。
とはいえこのまま放ってもおけない。
眉間に深い皺を寄せると、アリアスは状況を整理するために一度立ち止まった。
「つまり君は、王妃様にお会いする為だけに故郷から出てきたんですね？」
「はい、お渡ししたいものがあって」
今にも泣き出しそうな顔でシャルロットはそう答える。
「うーん……献上品なら城の者に頼めば、お渡しすることは可能かもしれないですが。
ただ、厳しいチェックは入るでしょうから、確実に届くとは言い切れません」
「そ、そうなんですか……」
ショックのあまりへなへなとその場に座り込んでしまったシャルロットを、アリアスは手を差し伸べながらしげしげと見つめた。
こんな少女が王妃に会うためだけに、何日も掛けて田舎から出てきたのには、それ相応の訳があるのだろう。この少女は一体何者なんだろうか。
そして、その腰に下がっている、３つに折りたたまれたロッドに目を留めると、少し驚いたように再び口を開いた。
「そのロッド、もしかして君は精霊士ですか？」

「あ、はい、一応……」
何故か自信なさげにそう答えるシャルロット。
精霊士であれば大したものだ。この世界の力の根源である精霊の力を借り、その力を具現化して術を行使する、いわゆる「魔法使い」である。
精霊士になるためには「素質」と、より上位の精霊士の下で「修練」が必要となるため、傭兵ほど数は多くはない。傭兵１０人の中に、１人精霊士がいればいい方だろう。

――カラーン……カラーン。

そこまで話した時、町中に１時を告げる鐘の音が響き渡った。
アリアスはハッとして顔を上げる。
「しまった、昼休みが……とりあえず僕と一緒に来てください」
そう言うと、シャルロットの返事も聞かず、足早に歩き出した。
「は、はい！」
荷物を運んでもらっている以上、シャルロットには付いていくという選択肢しかない。慌てて残りの荷物を担ぐと、アリアスの後を小走りで追いかけていった。

アリアス＝グレイ＝ブラッドリー２４才。
初めて女性に声を掛けたことを後悔した日であった。

第2話　貧乏くじと騎士

今日はツイてない。
職場に戻ったアリアスは、カウンター越しに、自分の目の前でぎゃんぎゃんとわめく男を横目にそう思った。
ここは、アリアスの勤め先である王立職業斡旋所。
城や一般人からのありとあらゆる依頼を取りまとめ、その依頼を遂行できる人間に割り当てるための機関である。
自分の目の前で真っ赤な顔で怒鳴り散らしている、見るからに柄の悪そうなこの男も、仕事を探しに来た一人だ。
「だからなんで傭兵のオレ様が、お貴族様の迷子ネコを探さなきゃいけねーのかって聞いてんだよ！そういうのは生活課の方で回される仕事だろうが！」
「ですから何度も申し上げているように、今貴方にご紹介できる仕事はこれくらいしかないのです。このネコちゃんは気性が荒いらしくて傭兵課に回ってきたんですよ。腕の見せ所ですね」
優しげな声色で諭すように語り掛けてはいるが、その表情は完全に無表情である。
男の方はと言うと、もちろんそんな対応に納得がいく訳もなく、先程から何度も同じ内容を繰り返すアリアスに、今に掴み掛かりそうな勢いで怒鳴り続けていた。
「ふざけやがって！！！」

王立職業斡旋所には２つの窓口がある。１つは『生活課』。
こちらは袋貼りや布縫い、露店の売り子募集など、一般人向けの生活に根ざした仕事が回される。
そしてもう１つが、アリアスも窓口を担当している、この『傭兵課』である。
モンスターや盗賊退治などの物騒な依頼が殆どで、腕っ節の強い

傭兵達が集まる。
しかし、一口に傭兵と言ってもその実力は様々、星の数程いる『自称・腕利き』達に
相応の難易度の仕事を割り振る指標となるのが「国家資格」という制度であった。
国家資格を持つ傭兵は「従士」となり、更に従士として一定の功績を挙げた者に「騎士」の階級が与えられた。
より難易度の高い依頼や、国直下の重要な任務には全てこの「騎士」階級の者達が当たった。
もちろん階級が上がるほど割りのいい、いわゆる「おいしい仕事」も回されるため、ほとんどの傭兵は従士、はたまた騎士を目指して日々鍛錬しているのである。
当然、ただの傭兵は腐るほど存在しており、底辺に行くほど仕事の取り合いは激化する、というわけだ。
元々気性の荒い者達が多く訪れるこの課で、今回の男のように、自分の力量不足は棚に上げ、受付で騒ぎを起こす者は珍しくなかった。それを上手くやり過ごすのもアリアス達受付係の仕事の一環である。
こうやってごねた所で良い仕事が与えられる事は無いというのに、毎回無駄な時間を過ごしていることに、何故気がつかないのだろうか。
脳筋（みそまで）（肉）とはよく言ったものだ――
しかし、アリアスは別にこの男のことで頭を悩ませているわけではない。
（彼女をどうしたものか……）
先程声を掛けてしまった少女の扱いについて思案していたのだった。
お金がないというシャルロットを、大荷物ごとあのまま放っておくわけにもいかず、せめて何か仕事でもあればと、とりあえず自分

の職場まで連れ帰ったまでは良かったのだが。
同僚達には「職場にナンパした子を連れ込むなよ」と盛大にからかわれ、その様子を見ていた現在攻略中のガールフレンドは、怒って今晩の食事の約束をキャンセルしてくる始末。
そんな苦労を知らない当のシャルロットは、長旅の疲れからか、職員用の休憩室でくぴくぴと眠っている所だった。
しかしアリアスがシャルロットを連れ帰ったのには、もう1つ理由がある。詳細を確かめる時間はなかったが、『精霊士』であるらしいからだ。
王立職業斡旋所は各地にあれど、本部であるここですら、精霊士の登録はそう多くはない。従士や騎士など危険な任務に赴く者が、パートナーとして精霊士を求めている姿も珍しくはなかった。
それに今は精霊士を名乗る者を放っておけない「ある問題」も発生している――。
もう1度大きくため息をつく。
「ちゃんと話聞いてんのか、兄ちゃん！！！」
と同時に、先ほどから怒鳴り続けている男が、更に顔を真っ赤にして、バンッ！とカウンターに手をついた。沸騰したヤカンよろしく、頭から蒸気が噴出しそうな勢いである。
「あ、まだいらしたのですか」
男の存在を完全に忘れていたアリアスは、馬鹿正直にそう言った。
これにとうとう何かが切れてしまったのか、男は手を振り上げながらカウンターから身を乗り出してきた。
「この……っ」
「いい加減にしろ」
バシっという鈍い音が当たりに響く。
振り上げた男の手が、いつの間にか後ろに立っていた男にがっしりと掴まれた音だった。
そしてそのまま後ろ手にねじり上げられる。
「い、いてててて……っ！」

「リノじゃありませんか、よく来てくれましたね」
アリアスは満面の笑みを浮かべ、嬉しそうな声でそう言うと、男の手をねじり上げている青年――リノに視線を送った。
リノは更に男の手をねじり上げ、その耳元で言葉を続けた。
「負け犬の遠吠えとはまさにこの事だな。ここで喚いている暇があるなら腕の１つでも磨いたらどうだ」
呆れた口調でそう言うと手を解き、男の背中を入り口の方へと突き飛ばした。
男は一瞬よろめいたが、すぐに体勢を立て直すとリノに向き直り、ありったけの眼力で睨んだ。
しかし、よくよく観察してみると、えもいわれぬ威圧感を放つその男・リノの腰には、騎士にしか帯刀が許されていない剣が見えるではないか。
「くそ、騎士かッ……！」小声でそう言うと、慌ててその場から逃げていった。

「助かりましたよ、さすが騎士様」
その様子に、アリアスは拍手をしながら笑顔で語りかけた。
「……」
このアリアスは女性にこそ紳士的で優しいが、男相手には愛想笑いのひとつもしないような男である。それは旧知の仲であるリノに対しても同じだ。
それが満面の笑みで自分を迎えているとなると――
「用事を思い出した、出直す」
恐らく面倒な仕事を押し付けられる。
一瞬でそう悟ったリノは、片手を軽くあげてそう言うと踵を返した。
「いやいやいやいや、冷たいなあ君は。ゆっくりして行ってください、紹介したい仕事もあるんです」
これに慌てたのはアリアスである。とても一介の事務員とは思え

ない身のこなしでひらりとカウンターを乗り越えると、慌ててリノの前に回りこんだ。
珍しく必死な様子のアリアスに、リノは一層身構える。
「騎士なら他にもいるだろう」
「君ほどの騎士はそうそういませんよ」
そう言う顔には「逃がさない」という気合が込められている。なんとか帰ろうとするリノの行く手を遮りながら、びしっと手の平をリノの顔の前に突きつけた。
「5人です、5人。君が別件で王都を離れていた1カ月間に行方不明になった精霊士の数です」
「……なんだと？」
リノの目に鋭い光が宿る。アリアスはそれを確認すると「とりあえず話を聞いてください」とカウンターに目をやり、リノを促した。

「1カ月程前ですが、城からある盗賊団についての調査依頼が入りました。前々から存在は確認されていた賊ですが、最近特に活動が活発になってきたようです。それで我々傭兵課は、ある従士とそのパートナーである精霊士の二人にその依頼を任せたのですが」
そこまで言うと数枚の登録証をリノに渡し、説明を続けた。
「その翌日、従士は町外れの廃屋で死体で見つかり、精霊士は行方不明になりました」
渡された登録証に目を通していたリノは「分不相応だっただけだろう」と、事も無げにつぶやく。
「ええ、そう判断した我々も依頼を下ろす先を慎重に選んだのですが、やはり二組目も精霊士だけが消え、騎士は死体で。その頃から依頼とは関係のない所でも精霊士が行方不明になるという事件が発生するようになりました」
リノは眉間に深く皺を寄せて話を聞いている。
「事態を重く見た王は、精霊士一人で出歩かないよう御布令を出され、我々もそれ以降は騎士に調査を依頼することにしたんですが

……そうすると出て来ないのですよ、奴らは。あくまで用があるのは精霊士だけのようです。
それにこの盗賊団はそこまで危険視されるような一団でもありませんでしたし、何故短期間でここまで成長してしまったのか、何が起こっているのか全く見当がつかないのです。
しかしこれ以上我々としても犠牲者を出すわけに行きませんし、もちろん放っておくわけにもいかない。君が最後の切り札なんです」
アリアスが「切り札」と言う通り、リノは王国でも名うての騎士であった。
元は騎士の最高位であり、貴族出身の者しか配属されない「近衛騎士」として城勤めをしていたのだが、自ら城を去ったという変わり者である。
「事情はわかったが、精霊士しか狙われないのならば私にも何もできん」
アリアスはその言葉を聞くと「わが意を得たり」と満面の笑みを浮かべ、リノの肩をバンバンと叩いた。
「そこは任せてください、君に紹介したい精霊士がいるんです！」
スキップでもしそうな足取りでカウンター裏の休憩室へと走って行くと、1分もしない内に、誰かを後ろに従えて戻ってきた。

「さ、君のパートナーです、自己紹介を」
そう言われ、ひょっこりとアリアスの後ろから顔を出したシャルロットは、カウンターに頭をぶつけそうな程勢いよくお辞儀すると、頭を下げたまま一気に自己紹介した。
「は、はじめまして！シャルロット・ベル・ブリュノーと言います！い、一応精霊士です！みんなからはロティって呼ばれていますっ……！」
聞かれてもいないのに、ご丁寧に愛称まで説明する。
「あ、あれ！？」
しかしロティが顔を上げるとそこには既に2人ともいなかった。

遥か前方、入り口付近でジリジリと鬼気迫る顔で競り合っている最中である。
「あんな少女を囮に使えとは、フェミニストが聞いて呆れる。私は帰るぞ」
「敵の狙いは精霊士ですよ？あんな可憐な少女精霊士を一人で放っておいたら、遅かれ早かれ捕まってしまうに決まっているじゃありませんか。ならば君と一緒にいるのが一番安全です。
君こそ見捨てるというんですか？あんな年端も行かない可哀相な少女を！」
2人は尚も小声で言い合う。
「そんなに心配なら家にでも閉じ込めておけ」
「それが彼女、一人で田舎から出てきたばかりでお金もないらしいんですよ。きっと人には言えない苦労をしてきたんですよ……。
君が彼女とパートナー登録をしてこの依頼を受けてくれれば、支度金も渡せるし彼女の身の安全も確保できます。何より君も任務に取り組みやすくなって全てが丸くおさまるじゃありませんか！」
確かにアリアスの言っていることは筋は通っているのだが、だからと言ってこんな少女のお守りをするのは御免だ。

「あ、あの、ごめんなさい、やっぱり私なんかじゃダメ、ですよね……」
いつの間にか2人の後ろに立っていたロティは、リノのマントの端をぎゅっと握り締めながら、半泣きの顔で見上げた。
その様子に、一瞬リノもひるむ。
アリアスはその隙を付くと、リノの手を掴み、右手に隠し持っていた契約書にぐっと押し付けた。
「ばっ、やめっ……！！」
魔法処理を施されたその契約書は、淡い金色の光を発すると、中央にリノの手形を吸い込み、一層輝いた。
呆然と眺めているリノとロティの前で、その最後の行に「遂行中」

の文字を浮かび上がらせたそれは、ひらひらと床に舞い落ちていった。

「契約完了ですね」

アリアスは契約書を拾い上げながらそう言うと、にこにこしながらリノに差し出す。

正式な契約締結の証である。こうなってしまっては依頼を完了させるか、莫大な違約金を支払わなくては契約は解除されない。しかも個人都合の解除となると、当面の間の依頼停止など、痛いペナルティも発生する。

「アリアス……」

リノは怒りで肩を震わせているが、時既に遅し。

ロティは何が起こったのかわからない、と2人の顔を見比べることしかできず、アリアスは悪魔のような妖艶な笑みを浮かべている。

端から見ると奇妙な組み合わせの3人だが、兎にも角にも、アリアスの健闘により、本日新たに騎士と精霊士のパートナーが誕生した。

――この王国の行く末に大きな影響を及ぼすであろう出会いだが、それに気付くのはもっともっと後の話である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6632z/

杯の召喚士

2011年12月28日05時49分発行